

右後肢の重度跛行を呈した 血管肉腫疑いの1症例

大和高原動物診療所

関 希実

症例

- サラブレッド種乗用馬 25歳 セン
- 病歴：2021/2/14、2022/12/28、
2023/1/20にRHフレグモーネ



(第33病日)

【初診 第1病日】

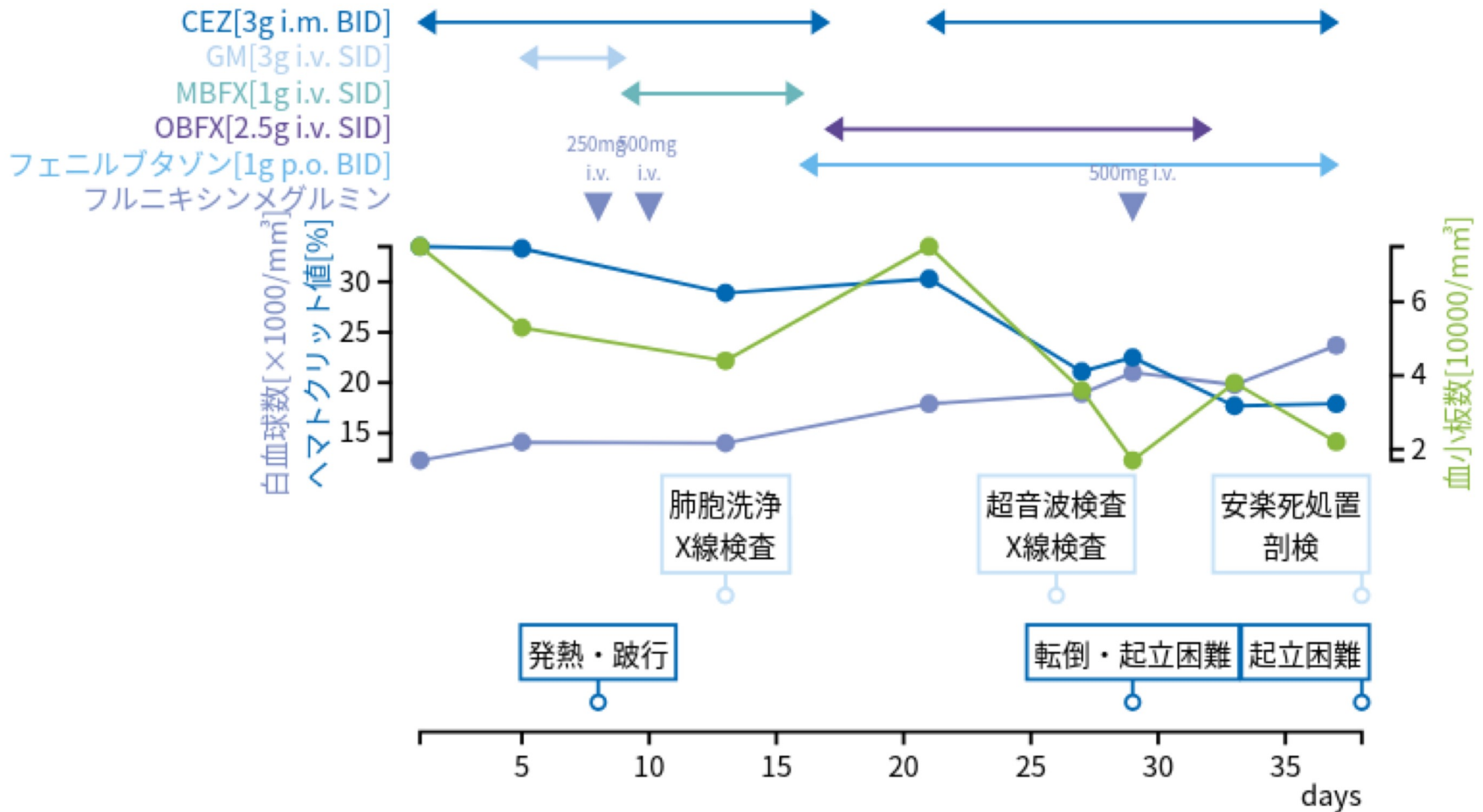
- 主訴：食欲低下、削瘦、体力低下
- 身体検査所見：T37.8、BCS3、聴診異常なし、
両飛節屈曲痛+、
- 治療：セファゾリン3g i.m. BID、
ビタミン・電解質製剤(PRE-FUEL) 6日間

血液検査(第1病日)

赤血球数	696	$10^4/\text{mm}^3$
白血球数	12,300	$/\text{mm}^3$
Hb量	12.1	g/dL
血小板数	7.5	$10^4/\text{mm}^3$
Hct	33.5	%
MCV	48.1	fL
MCH	17.4	pg
MCHC	36.1	g/dL

TP	7.7	g/dL
ALB	3.3	g/dL
Glob	4.4	g/dL
A/G比	0.8	mg/dL
T-bil	1.8	mg/dL
GOT	298	IU/L
γ -GTP	23	IU/L
ALP	202	IU/L
CPK	101	IU/L
LDH	456	IU/L
BUN	27.5	mg/dL
CRE	1.49	mg/dL

経過



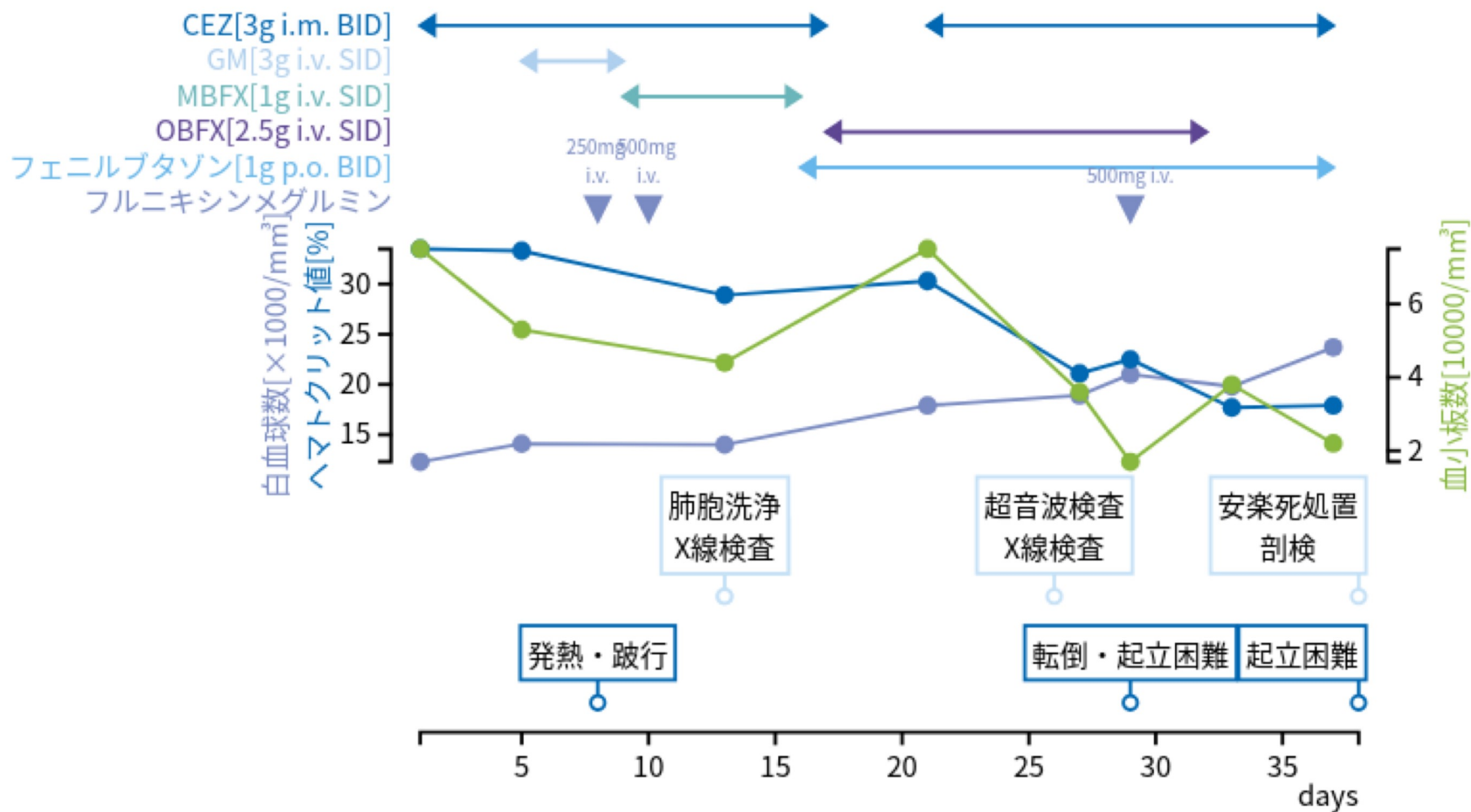
【第13病日】

- T38.2 P36 R24 肺雑音 +
→鎮静下にてBALチューブを用いて
気管支肺胞洗浄実施
 - ・ 感受性検査実施
 - ・ 10/16～オルビフロキサシン
2.5g i.v. SIDに変更

- RH常歩跛行
管近位に圧痛あり

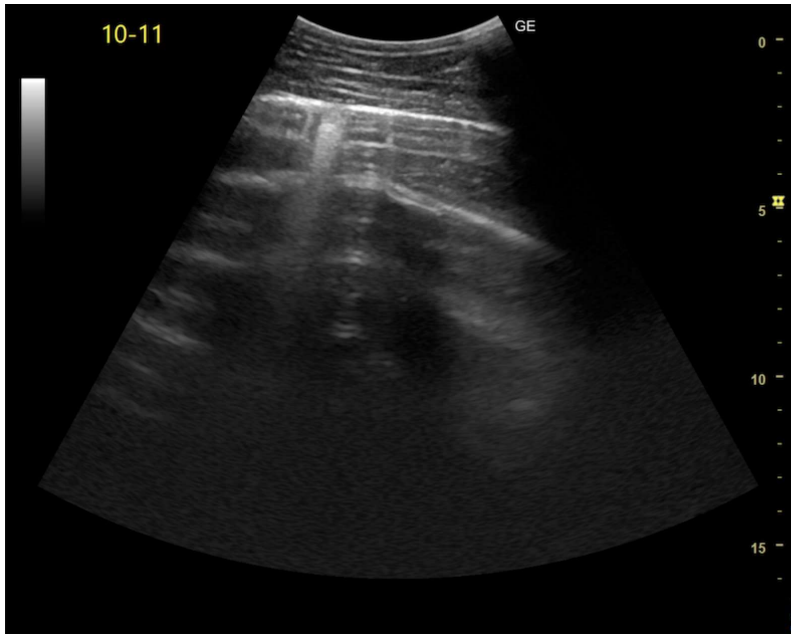


経過

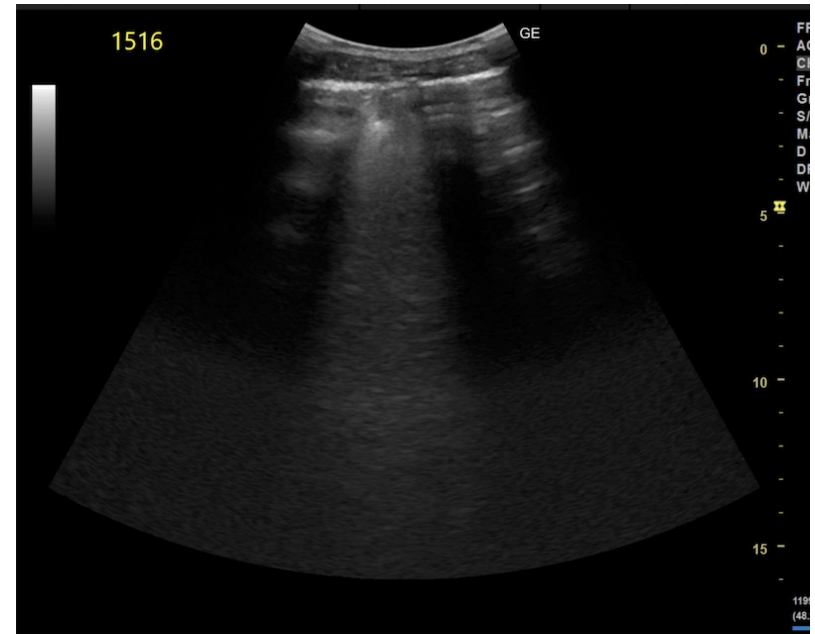


【第27病日】

- T37.6 P60 R16 肺雑音±（フェニルブタゾン投与前T39.6）
- RH下腿以下浮腫、圧痛は管近位のみ



左第10肋間

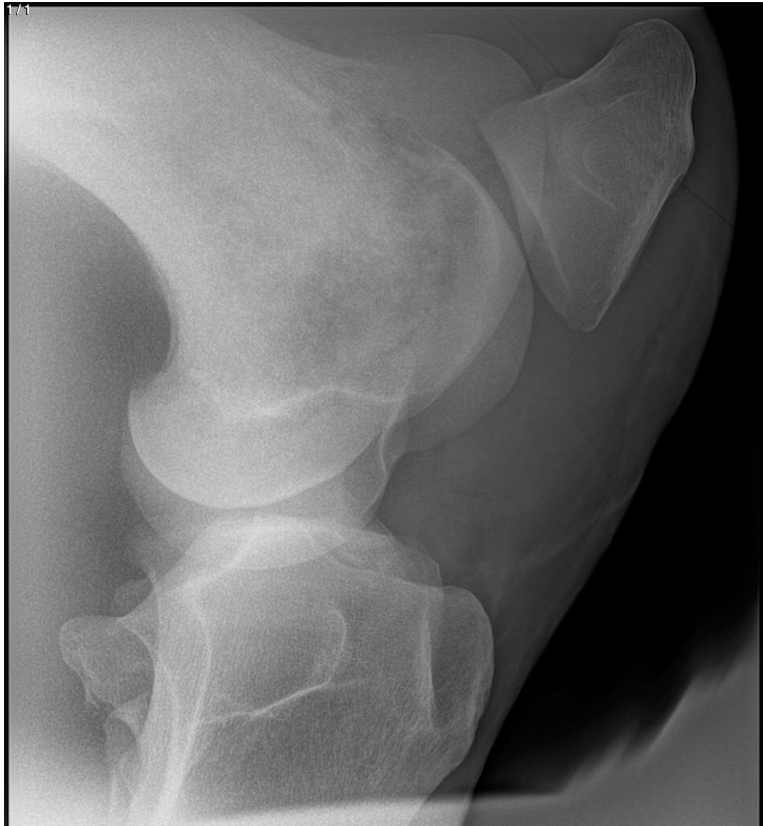


左第15肋間

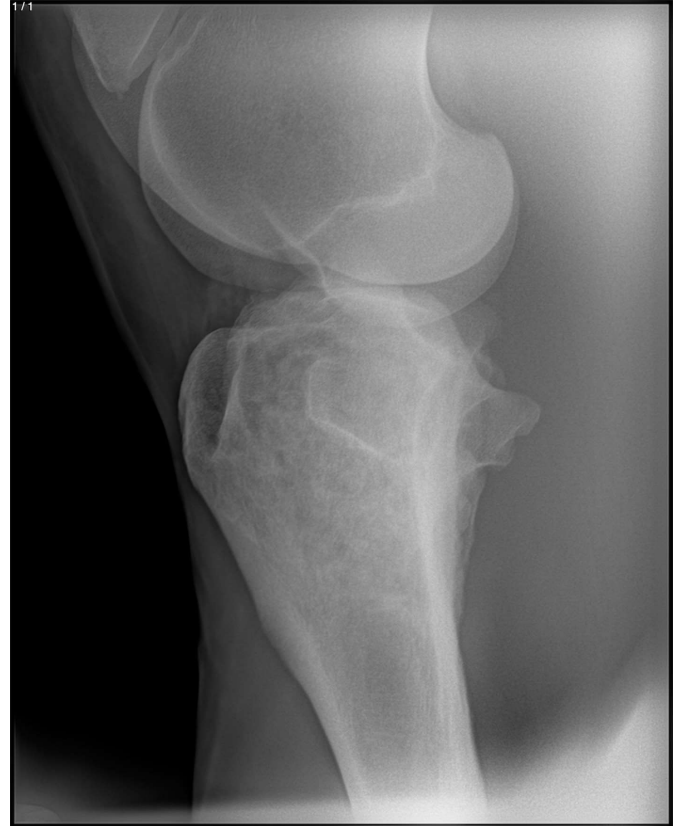
超音波検査実施、コメントテール所見あり

【第29病日】

- RH飛節以上屈曲痛 ++
- 右大腿骨遠位、左脛骨近位：骨吸收像？



RH



LH

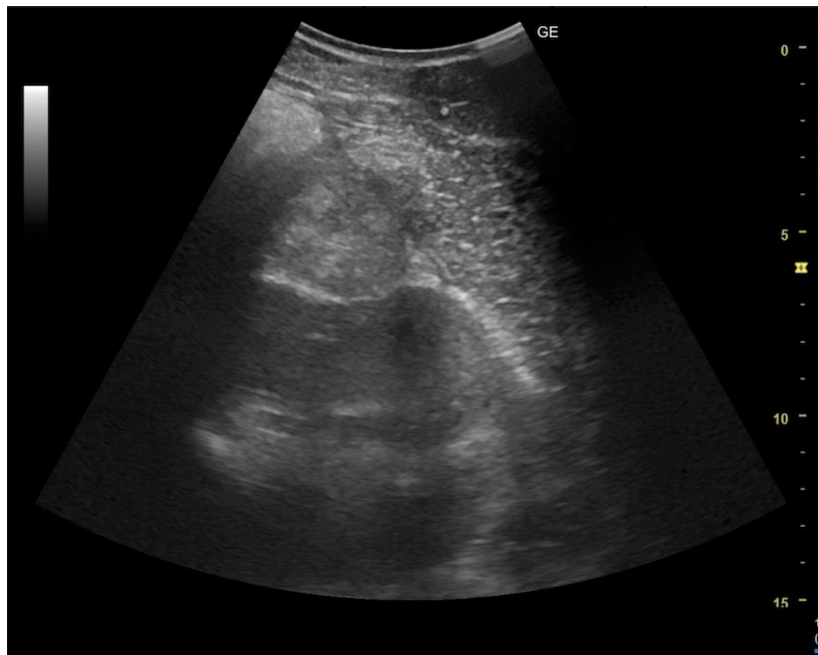
【第29病日】

- 腹部超音波検査

脾臓異常なし、肝臓ほぼ描出できず

左腎背側に直径3cm程度の腫瘤

右腎の皮質・髓質の境界不明瞭



左腎



右腎

血液検査(第37病日)

赤血球数	363	10 ⁴ /mm ³
白血球数	23,700	/mm ³
Hb量	6.4	g/dL
血小板数	2.2	10 ⁴ /mm ³
Hct	17.9	%
MCV	49.3	fL
MCH	17.6	pg
MCHC	35.8	g/dL

TP	7.5	g/dL
ALB	2.7	g/dL
Glob	4.8	g/dL
A/G比	0.6	mg/dL
T-bil	2.7	mg/dL
GOT	376	IU/L
γ-GTP	30	IU/L
ALP	329	IU/L
CPK	121	IU/L
LDH	777	IU/L
BUN	17.2	mg/dL
CRE	1.40	mg/dL
Ca	11.9	mg/dL

T38.9 P64 R32

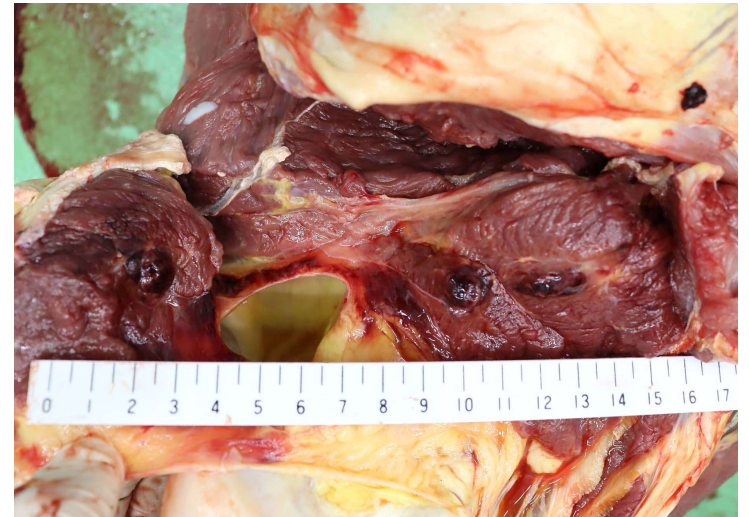
治療に対する反応なし

予後不良と判断し第38病日に安楽死処置
(当日朝右横臥にて起立困難)

剖検所見

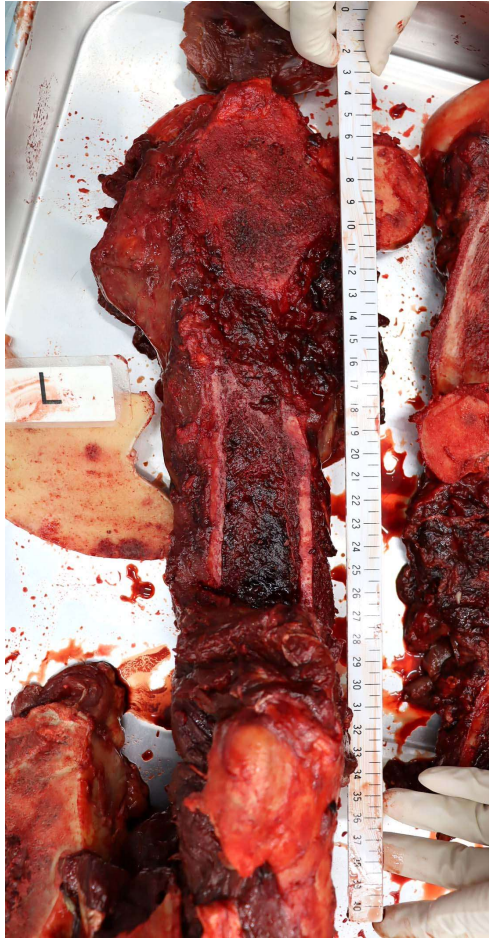


右後肢の皮下・筋間出血、膝関節内血腫



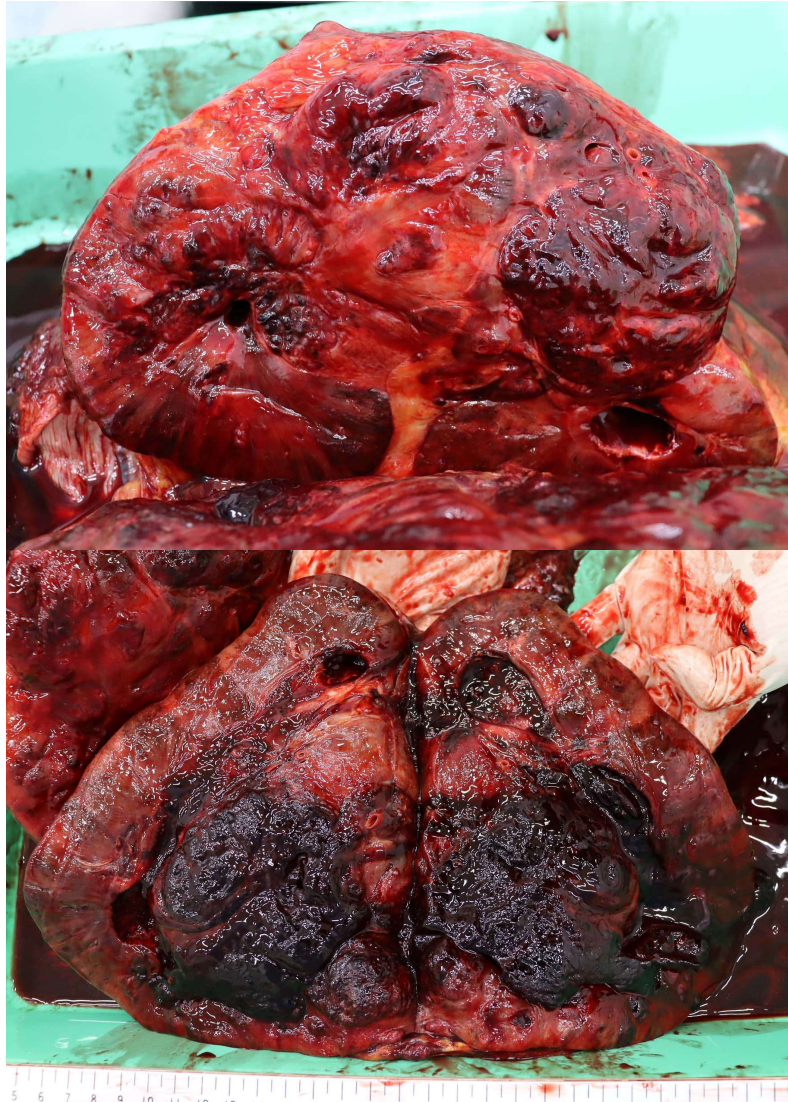
左後肢筋間の暗赤色腫瘤

剖検所見



右大腿骨骨幹部の骨髓内出血、遠位部海綿骨に暗赤色巣と灰白色巣が混在

剖検所見



◀ 右腎：27×18×13cm大に腫大
多結節性の暗赤色腫瘤化

▼ 左腎：被膜外に8×6×3cm大の
暗赤色腫瘤



馬の血管肉腫

- ・血管内皮細胞由来の悪性腫瘍

【発生】馬での発生は稀

0.01%(Braun 2007), 0.05%(Johns et al.,2005)

若齢：皮膚型多い

中～高齢：呼吸器、筋骨格系、心臓、脾臓、腎臓など

【症状】筋肉・皮下腫脹、食欲低下、疝痛、跛行、貧血など

【診断】生検、多くは剖検時に診断

【治療】可能な場合は外科的切除

【予後】外科的切除により治癒可能なケースもあるが

転移している場合は予後不良

考察

- 初期に見られた症状は食欲不振、白血球数上昇
⇒進行するにつれ発熱、跛行、皮下腫脹、貧血、血小板減少など他の症状が見られるように
- 右後肢跛行は骨転移によるもの
⇒この時のX線画像で腫瘍性疾患を疑う
- もう少し早い段階で腹部超音波検査を実施すべきだった
- 生検は出血のリスクも高く今回の症例でも生前診断は困難だったと考えられる